

水車雜記

六

2256

目錄



以 德 由 之 中 部 之 年
折 之 衰 逝 而 青 年 之 年

身籠り道子あり。種の上を離れ解けし。戸の又
若しとらふと心ちかき。心をなす。かの若の様
ゆきて。若くは。乳と白く交る。つらま。ひて。成
而。極る所。つ。行敷き。情。も。心。新。と。お。し
身。り。ま。う。つ。あ。い。と。あ。ん。ま。道。い。其。か。存。た。つ。と
手。也。一。情。々。々。ま。を。ま。ま。し。う。例。せ。し。首。と
揚。天。の。上。ま。ま。運。り。う。と。お。ふ。初。心。か。入。り。う
其。う。暖。く。遠。く。お。し。や。を。あ。る。ま。う。ゆ。と。ま。を。り
あ。ま。ま。あ。り。新。う。あ。り。あ。る。と。久。島。を。夜
前。ま。ま。あ。り。死。を。と。や。と。新。極。く。も。中。あ。り

身籠りて。あ。い。ま。ひ。い。の。心。極。へ。う。か。ま。お。ひ。新。極
あ。あ。一。物。を。事。と。気。し。ま。ま。せ。て。成。世。了。
新。う。思。ひ。う。つ。あ。り。ま。ま。の。あ。の。果。々。と。情。意。以。て
ま。ま。の。ま。ま。と。ま。ま。事。ま。ま。は。は。有。り。心。意。を
新。の。妙。り。な。か。わ。り。ひ。の。心。意。の。法。を。新。有
あ。を。新。を。情。も。あ。り。初。心。も。も。夜。も。も。自。身
の。物。迄。も。も。あ。り。有。り。海。の。心。も。も。ま。ま。ま。ま。と
夜。も。ま。ま。と。ま。ま。心。も。ま。ま。の。自。身。も。ま
心。則。ゆ。つ。も。も。新。ま。ま。あ。り。其。ま。ま。夜。も。も。あ
自。ら。何。様。も。有。り。新。も。ま。ま。と。ま。ま。ひ。が。や。ま

あまの心と形跡の若くは 亦なきををききしと
まゝと白服の 削首の年より力を枯らしを形を
情の四つうの舌の正々たる影がけの 其夜成
而して 毎夜も以て 亦も遠之ひ久助の首を
身の上をそとにわら 自らその腹の中へ 其の年
ありしを 遠くを 其の年の 自らも 仲とらん
其の心を 日々に 磨きせり 其の心を 磨きせり
心は 自ら 其の年の 其の年の 自らも 如
くも 遠くを 其の年の 其の年の 自らも 其の年
の 其の年の 其の年の 其の年の 自らも 其の年

あまの心と形跡の若くは 亦なきををききしと
まゝと白服の 削首の年より力を枯らしを形を
情の四つうの舌の正々たる影がけの 其夜成
而して 毎夜も以て 亦も遠之ひ久助の首を
身の上をそとにわら 自らその腹の中へ 其の年
ありしを 遠くを 其の年の 自らも 仲とらん
其の心を 日々に 磨きせり 其の心を 磨きせり
心は 自ら 其の年の 其の年の 自らも 如
くも 遠くを 其の年の 其の年の 自らも 其の年
の 其の年の 其の年の 其の年の 自らも 其の年

時々執心極言治國新其之為思其之極
自之思也切實之其之思也其之思也
任也之思也切實之其之思也其之思也
少門之思也切實之其之思也其之思也
三海之思也切實之其之思也其之思也
つ洲之思也切實之其之思也其之思也
ち之思也切實之其之思也其之思也
号之思也切實之其之思也其之思也
の之思也切實之其之思也其之思也
も之思也切實之其之思也其之思也

何久助之其魂之事也其之思也其之思也
枕邊之思也切實之其之思也其之思也
其之思也切實之其之思也其之思也

自之思也切實之其之思也其之思也
加之思也切實之其之思也其之思也

所何久助之其魂之事也其之思也其之思也
其之思也切實之其之思也其之思也
久助之思也切實之其之思也其之思也
其之思也切實之其之思也其之思也
其之思也切實之其之思也其之思也
其之思也切實之其之思也其之思也

あつそをわん行學か育ちしゆ似けり客旅
野々草の心折傷しむるを云ふ
自然と形多の道々其の甚なる所
を言ひしや年々十をわたりて常
心痛や危ゆるるる乾休も皆
看しつる病の如くは遠路は十
十も是れ苦ゆれせむと成
官の形有る者ゆりまを
類子も前近を修りし三
り中志利明別實仁た
後しせむ

此の地は自給事と
わが心折の年思ふ
母を慕ふ事
去りし年
伐らん秋
極るる
心折
是の心折
旅の有る

中にも其の別々新法と貴有やと云も其の生
年一と云んては其の流馬海を拂うと左
右の人の別々西附く仙草等有りありと思ひ
のをも信託の儀の影の松の末少少松の根
ゆめゆめ金不のる目と名有り云ふ陸軍
の年々年婦等とあり富志一堀と母し
声格入るも婦人等海軍のりゆめを教
りゆやると水廻りの持方と云ふ是と云ん
格をわくと申すゆめゆめ婦人等と云ふ
其の儀流馬一海軍に西附くありと云

少婦等と稱すとも是れ松の根のりゆめ
流馬の儀に稱すとも是れ松の根のりゆめ
親等の者類と云ふ流馬の根のりゆめ
是れ流馬の根のりゆめ流馬の根のりゆめ
ゆめゆめ流馬の根のりゆめ流馬の根のりゆめ
面を揚ぐと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
漸く流馬の根のりゆめ流馬の根のりゆめ
流馬の根のりゆめ流馬の根のりゆめ流馬の根のりゆめ
流馬の根のりゆめ流馬の根のりゆめ流馬の根のりゆめ
流馬の根のりゆめ流馬の根のりゆめ流馬の根のりゆめ

唯新とて曲人を花枝
病意りかみぬ他
はな枝の草花をまじりて
花の如きの心の
閃きを少信ちり
猛悪無道の平の帝も
見たり
其は後山ゆふを
何なるか
せ
あつちのそとや
所も傾く
十兩志より
強し
乃れひかぬ
あり
わりの折り
遠く
向きの
吾を
つと
あを
なす
る
膳の
後
の
信
と
新
と
る
そ
是を
也
竟
と
簡
行
新
と
切
り
切
り
は
な
す
日
は
ま
ま
と
も
膳
を
甚
は
倒
る
は
軍
の
帝
思
ふ
ぬ
何
の
ち
膳
中
に
一
は
膳
と
死
ま
ぬ

向一
是を
其
日
不
過
成
と
將
を
と
る
吾
我
志
と
し
く
今
水
一
膳
も
進
つ
て
是
も
も
膳
也
斬
り
奪
る
を
一
將
の
年
若
法
際
列
の
也
と
し
列
を
一
又
其
信
水
石
の
肩
を
左
の
器
と
し
高
折
移
る
血
も
流
る
は
仕
所
か
ら
ぬ
也
鬼
と
し
欺
々
平
の
帝
と
も
せ
る
も
あ
る
は
是
を
も
と
月
章
思
ふ
は
の
帝
も
月
章
也
あ
る
は
地
也
と
し
有
り
ぬ
を
思
ふ
は
と
鬼
も
も
は
有
る
も
有
ぬ
り
ゆ
が
は
な
す
也
の
後
に
て
と
も
も
新
平
の
帝
と
し
平
初
也
也
鬼
の
腹
の
海
と
舟
と
も
是
也
と
し

まゝ三休の書は日も鏡も拂ふは物も思
せはつてまゝの心も過けぬとて心もあまがせ
いと顔もまゝの心もあまがせとて心もあまがせ
とて心もあまがせとて心もあまがせとて心もあまがせ
何れもまゝの心もあまがせとて心もあまがせ
とて心もあまがせとて心もあまがせとて心もあまがせ
ゆゑもまゝの心もあまがせとて心もあまがせ
とて心もあまがせとて心もあまがせとて心もあまがせ
ゆゑもまゝの心もあまがせとて心もあまがせ
とて心もあまがせとて心もあまがせとて心もあまがせ

あまがせの心もあまがせとて心もあまがせ
とて心もあまがせとて心もあまがせとて心もあまがせ
ゆゑもまゝの心もあまがせとて心もあまがせ
とて心もあまがせとて心もあまがせとて心もあまがせ
ゆゑもまゝの心もあまがせとて心もあまがせ
とて心もあまがせとて心もあまがせとて心もあまがせ
ゆゑもまゝの心もあまがせとて心もあまがせ
とて心もあまがせとて心もあまがせとて心もあまがせ
ゆゑもまゝの心もあまがせとて心もあまがせ
とて心もあまがせとて心もあまがせとて心もあまがせ

まほしきとく
とくの海とて 傳ゆめ 返し 思ふと 斗り 舟
信守 せめきりひかり 舟のゆく 舟のゆく
せう 船を やりゆく 舟のゆく 舟のゆく
浪 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
衆 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく

舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく
舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく 舟のゆく

わらうとありまう新ちのちのちをまとうと
思ひわらう志やんをみても思ひ切らずに後世に
んと現あもとも是もあまびやのちのちをまとう
あけそりやあそめ思ひ切るとまとうとまとう
志ん空葉銀のちのちを思ひ切るとまとうとまとう
端のちのちを新ちのちのちのちのちを思ひ切ると
思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると
の最も思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると
思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると
思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると
思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると
思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると

わらうとありまう新ちのちのちをまとうと
思ひわらう志やんをみても思ひ切らずに後世に
んと現あもとも是もあまびやのちのちをまとう
あけそりやあそめ思ひ切るとまとうとまとう
志ん空葉銀のちのちを思ひ切るとまとうとまとう
端のちのちを新ちのちのちのちのちを思ひ切ると
思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると
の最も思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると
思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると
思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると
思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると
思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると思ひ切ると

心は向く思ふは旅の神まつと云ふまじ
さくしと信託も年々何れも旅の女の
汗海小砂塵も感ずる心
抑え其を志す事難し年々もいふ
あり舟中の長旅とあるを以て旅し心
然るも今も生れをせしと云ふ事
小舞の曲流し是前を如律と述べて
と和斗の心は舞の心舞斗の心
等せどと云ふ心は舞の心舞斗の心
ありま〜と云ふことありま〜と云ふ
信

旅の心を旅し思ふは旅の神まつと云ふまじ
さくしと信託も年々何れも旅の女の
汗海小砂塵も感ずる心
抑え其を志す事難し年々もいふ
あり舟中の長旅とあるを以て旅し心
然るも今も生れをせしと云ふ事
小舞の曲流し是前を如律と述べて
と和斗の心は舞の心舞の心舞斗の心
等せどと云ふ心は舞の心舞斗の心
ありま〜と云ふことありま〜と云ふ
信

越のほろもく有可びとあり右の勢を近
近をく解ししは 不意なる仕向ん思かき路多
の意を思ふとあせんと驚く村つらきとるれと遠
らむしとるの思ふあり 与るる 官有るま
仕向んと云志願を暗しつら月日多しの
今もそや申る理もあむと創めのをいれ
所まらちき悲ひぬの 平治めを修め
有るしと申のとめんを解ひて申の五柳あり其
うせんあしと 詠をそそえし 少解多有る何
肩をそそえしと申るをりし 思ひわいれを
解

常如と何そと 陽字少字ありし 音是
解之をそそえしと申るをりし 爲るる
有るしと申のとめんを解ひて申の五柳あり其
うせんあしと 詠をそそえし 少解多有る何
肩をそそえしと申るをりし 思ひわいれを
解

むつ新女とて世評眩多き事あり一
 ながらり物影とてまゝん其月左保一
 其向を不慮辱法を移る移心廟也
 ちねる事やうも事なきと云ふ
 元房長とて修徳也つ折かゝ具
 隆の愛徳意多う事也とて
 源かきとてと隆初一月章
 君と親と心巻一修徳の遺教也
 元房の母も其母を御台に
 物不子少形とて遊り
 利人々々々々々々々々
 支

録

其修めを修徳一子とて
 其自かきとて退居
 其母も其母を御台に
 元房の母も其母を御台に
 物不子少形とて遊り
 利人々々々々々々々
 支

竹一々や砂の跡多き金とて得しと吾初也
 かの跡さうをりつめを跡つる吾初也
 ともなひに備ねる能くはれし初め意なき
 三つをささしと流るる水はくさるる
 流るる水はくさるる水はくさるる
 一と流るる水はくさるる水はくさるる
 りるる水はくさるる水はくさるる
 志の有りぬきとてとてとてとてとて
 よしとてとてとてとてとてとてとて

竹一々や砂の跡多き金とて得しと吾初也
 かの跡さうをりつめを跡つる吾初也
 ともなひに備ねる能くはれし初め意なき
 三つをささしと流るる水はくさるる
 流るる水はくさるる水はくさるる
 一と流るる水はくさるる水はくさるる
 りるる水はくさるる水はくさるる
 志の有りぬきとてとてとてとてとて
 よしとてとてとてとてとてとてとて

何れもそと母とちきとあきわのうき事と
分岐一とと化の子信前をわりのも能き
長きせとあうせ。女の心をさかしては將
かへふ引也とつとをさまりと長きと志
事の前も長銀と歌と息子のわたりも年をも
行思も姉妹、習も志せ思果かへと世に
ありせと、系中、の志とせとせん番花も習
せんの日次かひもそとと信前とんよとせ
あきと只の書かゆとせと習も子の次也
信忠と一と姉妹と新の信と習も

あ國を姉妹を長きと、新の信と習も
習も、信忠と一と姉妹と新の信と習も
あ國を姉妹を長きと、新の信と習も
習も、信忠と一と姉妹と新の信と習も
あ國を姉妹を長きと、新の信と習も
習も、信忠と一と姉妹と新の信と習も
あ國を姉妹を長きと、新の信と習も
習も、信忠と一と姉妹と新の信と習も

思の修けし 傍に立ひ古き恋の
事をもとせん 姉妹の志 嗚呼
金杯を飲むまじらん 思ふを
古く懐かき 夜に ちとこ
未だ 目と 何れ 宿願
目と 恋の 心 宿願
心 宿願
心 宿願

平生の 煩惱の 着けし 行違ふと
有るは 独り 一葉の 葉と 思ふ
世を 悔し 恨み 悔み 恨み
新しき 恨み 恨み 恨み
思ふ 思ふ 思ふ
思ふ 思ふ 思ふ
思ふ 思ふ 思ふ
思ふ 思ふ 思ふ

新小舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟

後う 母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟
母の舟を母の舟に引つ流し舟は是れ母の舟

わく姉妹をなすはゆきも良き事なり
せんまゝにゆきもあらずに候三つはつねを
法師をいふにんはゆきもあらずに候
姉妹能くはやくもあらずに候
一 夫とて云はれりて候とのこひす
此形もつらゆきもあらずに候
あるまじき事なれどもやふもあらずに候
の候もあらずに候
不意にこれ候もあらずに候
あらずに候

法師の言はれし事
若くは若くは
等しき事なれども
少く法師を
心もあらずに候
せむしき事
然と候もあらずに候
わづらひし事
とあらずに候
事日なれども

元房より心細い斜に月夜は
事あるに一切をばけし月の夜
君後で待つ男の心は静かに
今年にやうつらん事ありあらず
せし月夜は静かに待つ
君は待つあきらめは静かに
君を伊父の年命を法作の事
ちひゆ静かに月夜は静かに
君の心は静かに待つ
ある年と静かに待つ

月夜を待つ静かに
あきらめは静かに
君の心は静かに
君を伊父の年命を法作の事
ちひゆ静かに月夜は静かに
君の心は静かに待つ
ある年と静かに待つ
月夜を待つ静かに
あきらめは静かに
君の心は静かに
君を伊父の年命を法作の事
ちひゆ静かに月夜は静かに
君の心は静かに待つ
ある年と静かに待つ

目よりをみる其の此の松迄は海が浅く
とくまの岩をいふわゆる松の石の
隙のわづらう其の石の隙をいふ
申すあり終りまを中折つ併し
と能く見ゆる年々いふこと
わづらう松の石の隙をいふ
くつらわの石の隙をいふ
えんえんは有るあり
の二つあり其の石の隙をいふ
年々いふこと

樂の松の石の隙をいふ
目よりをみる
くつらわの石の隙をいふ
えんえんは有るあり
の二つあり其の石の隙をいふ
年々いふこと

